

# サハ語とトゥバ語の疑問詞疑問接辞の対照

## A contrastive study on the WH-question suffixes in Sakha and Tyvan

江 畑 冬 生  
EBATA Fuyuki

This paper conducts a contrastive analysis of the WH-question suffixes in Sakha and Tyvan. Both Sakha and Tyvan structurally distinguish between WH-questions from yes-no questions. The use of the WH-question suffixes in the two languages is apparently similar, but a contrastive study reveals that the Tyvan suffix has a wider range of use than the Sakha suffix. One of the major characteristics of the Tyvan WH-question suffix is that it is also used in negated existential sentences, which contain no WH-word. This paper examines the use of the Tyvan WH-question suffix from a pragmatic perspective and concludes that it is adequately explained from egophoricity. The Tyvan WH-question suffix describes the hearer's knowledge status in interrogative sentences while the use of the suffix is related to the speaker's knowledge status in negated existential sentences.

キーワード： チュルク諸語 記述言語学 対照言語学 疑問詞疑問文 自己性

Keywords: Turkic languages, Descriptive linguistics, Contrastive linguistics, WH-question, Egophoricity

### 1. はじめに

サハ語およびトゥバ語では、肯定疑問文と疑問詞疑問文の構造が異なる<sup>1</sup>。系統としては同じチュルク諸語に属する両言語において、肯定疑問文では文末に接語が現れ、疑問詞疑問文では疑問詞疑問接辞が述語に付加される。本論文ではまず、同系の2つの言語の疑

---

<sup>1</sup> サハ語（ヤクート語）はロシア連邦のサハ共和国を中心に分布するチュルク系の言語であり、その話者数は約45万人である。トゥバ語はロシア連邦のトゥバ共和国を中心に分布するチュルク系の言語であり、その話者数は約28万人である。本研究は、科学研究費若手研究(A)「チュルク諸語北東グループ未解明言語の調査研究：包括的記述と史的変遷の解明」（研究代表者：江畑冬生）等の支援により筆者がこれまでに行ったフィールドワークに基づいている。本論文の例文は、特に断りの無い限り、筆者による聞き取り調査または筆者が作成したコーパス（WEB上で公開された新聞記事に基づく）からのものである。本論文は、日本言語学会第157回大会（2018年11月17日京都大学）での口頭発表の内容に加筆したものである。

問詞疑問接辞の用法を記述する。本論文では次に両言語の疑問詞疑問接辞の用法を対照し、サハ語の疑問詞疑問接辞に比べトゥバ語の疑問詞疑問接辞の方が広い範囲で用いられることを示す。トゥバ語の疑問詞疑問接辞は、*čok*「ない」を述語とする平叙文にも現れることを特徴とする。本論文ではこの用法に関して主に語用論の観点から考察し、自己性(egophoricity)からの説明を行う。

第2節では、サハ語の疑問詞疑問接辞の用法を記述する。第3節では、トゥバ語の疑問詞疑問接辞の用法を記述する。第4節では、トゥバ語の疑問詞疑問接辞が *čok*「ない」を述語とする平叙文にも現れうる理由について、主に語用論の観点から考察する。第5節では、本論文の結論をまとめる。本論文では両言語の例文において、疑問詞疑問接辞を太字にする。

## 2. サハ語の疑問詞疑問接辞

サハ語では、肯否疑問文と疑問詞疑問文の構造が異なる。肯否疑問文では文末に接語=*duo* が現れ、疑問詞疑問文では疑問詞疑問接辞-(*n*)*ij* が述語に付加される<sup>2</sup>。

(1) *kör-dü-**vüt** =duo*

見る-PST-2PL=Q

「見ましたか？」

(2) *tugu **kör-ö-vün-ij***

何:ACC 見る-PRS-2SG-WHQ

「何をしていますか？」

サハ語の疑問詞疑問接辞は基本的に、疑問詞疑問文の主節述語にのみ付加される(引用節述語にも現れるが、これは主節述語に相当すると見なす)<sup>3</sup>。ただし疑問詞疑問接辞-(*n*)*ij* は、文法的に必須の要素ではない。例文(2)から疑問詞疑問接辞を取り除いても、非文にはならない。

<sup>2</sup> サハ語の接尾辞は一般に、音節構造や母音調和規則等による多くの異形態を有する。疑問詞疑問接辞-(*n*)*ij* にも9つの異形態がある。

<sup>3</sup> ただし例外として、主節述語に後続する文末接語に疑問詞疑問接辞が付加されることがある。いずれにせよ、サハ語の疑問詞疑問接辞は主節述語に現れる。名詞述語文にも動詞述語文にも現れうるが、近過去接辞-*di* (否定-*beti*) の付加した動詞述語には決して付加しない。

疑問詞疑問接辞は、次の2つの場合に、疑問詞疑問文の主節述語以外に現れる。1つは反語文の場合である。反語文にも疑問詞が用いられ、主節述語には疑問詞疑問接辞が付加される。なお疑問文と反語文は、文脈から切り離された場合には区別することができない。

- (3) *tugu*      *kepset-er-i-n*                      *kim*      *bil-ie-j*  
 何:ACC      話す-PTCP.PRS-3SG-ACC      誰      知る-FUT:3SG-WHQ  
 「彼が何を話すのか、誰が分かるか（誰にも分からない）」

- (4) *kim*      *üle-te*      *suox*      *xaal-ia-n*                      *baɣar-ia-j*  
 誰      仕事-ABE      ない      残る-FUT:3SG-ACC      望む-FUT:3SG-WHQ  
 「誰が仕事なしのままであることを望むだろうか（誰も望まない）」

もう1つは譲歩節の場合である。譲歩節は疑問詞を含み、述語動詞の形態としては主節述語同様に定形動詞の形式を取る。さらに日本語の副助詞「も」に相当する接語=*da* が後続する。以下の例のように、譲歩節述語にも疑問詞疑問接辞が付加されることがある。

- (5) *xantan*      *akal-bik-kin-ij* =*da*                      *onno*      *ilt*  
 どこから      持ってくる-PST-2SG-WHQ =も      そこに      運ぶ:IMP.2SG  
 「どこから持ってきたとしても、そこに運べ」

- (6) *ardax*      *töhö*      *elbek-ij*      *uonna*      *sire*      *inčexej-ij* =*da*  
 雨      どれほど      多い-WHQ      そして      土地      湿った-WHQ =も  
*olbox sitere*      *soččonon*      *ürdük*      *buol-ar*  
 寝床      その分      高い      なる-PRS:3SG  
 「雨がどれほど多く地面が湿っているとしても、寝床はその分だけ高くなる」

このようにサハ語の疑問詞疑問接辞は、疑問詞疑問文だけでなく、反語文および譲歩節にも現れる。ただしいずれの文（節）も、疑問詞を含み定形動詞を述語とする点では共通している。

先行研究でサハ語の疑問詞疑問接辞について詳しく言及したものは無い。Xaritonov (1947: 161-162) や江畑・Popova (2006: 9) でも疑問文での用法に関するわずかな記述に留まり、反語文や譲歩文に関する記述は見られない。

### 3. トゥバ語の疑問詞疑問接辞

トゥバ語でも、肯否疑問文と疑問詞疑問文の構造が異なる。肯否疑問文では文末に接語=*be* が現れ、疑問詞疑問文では疑問詞疑問接辞-(*il*) が述語に付加される<sup>4</sup>。

- (7) *bil-ir =siler =be*  
 知る-AOR=2HON=Q  
 「知っていますか？」<sup>5</sup>

- (8) *ad-iŋar*                      *kim-il*  
 名前-POSS.2HON      誰-WHQ  
 「お名前は何ですか？」

トゥバ語の疑問詞疑問接辞も基本的に、疑問詞疑問文の主節述語にのみ付加される（サハ語の場合と同様、引用節述語に現れる場合は主節述語相当と見なす）。ただし疑問詞疑問接辞-(*il*) は、文法的に必須の要素ではない。例文(8)から疑問詞疑問接辞を取り除いても、非文にはならない。またトゥバ語の疑問詞疑問文で疑問詞疑問接辞が現れる場合、疑問文の答えが聞き手から得られる（はずだと話し手が想定する）という語用論的な含意がある（一方で別な接辞-*dir* が主節述語に現れる場合、疑問文の答えを聞き手は知らないという語用論的な含意がある。この点について詳しくは、接辞-*dir* の用法について記述した江畑(2018)を参照されたい）。

疑問詞疑問接辞は、次の4つの場合に、疑問詞疑問文の主節述語以外に現れる。1つは反語文の場合である。反語文にも疑問詞が用いられ、主節述語には疑問詞疑問接辞が付加される。なお疑問文と反語文は、文脈から切り離された場合には区別することができない。

- (9) *on-u*                      *kancaar*                      *bil-ir-il*  
 それ:ACC                      どのように                      知る-AOR:3-WHQ  
 「それはどうやって知るか？（どうしても分からない）」

<sup>4</sup> トゥバ語の接尾辞も一般に、音節構造や母音調和規則等による多くの異形態を有する。疑問詞疑問接辞-(*il*)にも5つの異形態がある。

<sup>5</sup> チュルク諸語研究において伝統的にアオリストと呼ばれる形式がある。トゥバ語のアオリストは、主節では基本的に未来（加えて普遍的現在）を表し、連体節では非過去の意味で用いられる。

- (10) *mindig sös-tü kim diŋna-an-ıl utka-zı-n*  
 こんな 言葉-ACC 誰 聞く -PST-WHQ 意味-POSS.3-ACC  
*kim bil-ir-ıl*  
 誰 知る-AOR:3-WHQ

「こんな言葉を誰が聞いたのか、その意味を誰が知っているのか？（誰も知らない）」

2 つ目は譲歩節の場合である。譲歩節は疑問詞を含み、述語動詞の形態としては主節述語同様に定形動詞の形式を取る（さらに副詞 *baza* 「また」が後続する場合もある）。以下の例のように、譲歩節述語にも疑問詞疑問接辞が付加されることがある。

- (11) *xömür daš-tiŋ örtek üne-zi-ni čü-den turgustun-up tur-ar-ıl*  
 石炭-GEN 価格-POSS.3-ACC 何-ABL 構成される-CVB AUX-AOR-WHQ  
*baza on-u kızıgaarla-ar arga-zı bar =irgi =be*  
 また それ-ACC 輸入する-PTCP.PRS 方法-POSS.3 ある =HON=Q

「石炭の価格が何により決まっていますが、それを輸入することはできますよね？」

- (12) *baydal kandig tur-gan-ıl baza amgi üe-de*  
 状況 どのよう 立つ-PST:3-WHQ また 現在の 時-LOC  
*öskerliışkin-ner dugayında tanış-tır-gan*  
 変化-PL ついて 知る-CAUS-PST:3

「状況がどのようであろうと、現時点での変化が共有された」

3 つ目は相関構文の場合である。相関構文とは、先行節の疑問詞と後行節の指示詞とが同一指示となる構文を指す (Dixon (2010: 357) の説明では “In some co-relative constructions, each clause could make up a complete sentence on its own, the CA being expressed by a content question word in the first clause and by a corresponding pronoun or demonstrative in the second”, CA とは common argument を指す)。トゥバ語の相関構文でも、先行節には疑問詞を含み後行節には指示詞を含んでいる。相関構文の先行節には疑問詞疑問接辞が現れ得る。

- (13) *kim ür čurtta-ar-ıl ol xöy-nü kö-ör*  
 誰 長く 生きる-AOR:3-WHQ それ 多く-ACC 見る-AOR:3

「長生きする人が多くのことを見る」

[Anderson and Harrison (1999: 89)]

- (14) *kayda xöy möögü bar-İL inaar bar-aali-ŋar*  
 どこに 多い キノコ ある-WHQ そこに 行く -IMP-1PL  
 「キノコがたくさんある所に行こう」 [高島 2008: 218]

4つ目は *čok* 「ない」を述語とする平叙文（以降では単に「存在否定文」と呼ぶ）の場合である。例文(15)から明らかなように、これまでのケースとは異なり、この場合には疑問詞は現れない。

- (15) *am čay-İM čog-ul*  
 今 暇-POSS.1SG ない-WHQ  
 「いま私は暇がない」

Isxakov and Pal'mbax (1961), Krueger (1977), Aydemir (2015) などの先行研究では、疑問詞疑問接辞-(*il*)の用法に関する記述がない。Anderson and Harrison (1999: 88-89) では、トゥバ語の疑問詞疑問接辞が相関構文にも現れることを指摘し例を示している<sup>6</sup>。しかしながら Anderson and Harrison (1999) でも、疑問詞疑問接辞が存在否定文に現れる例は示されていない。高島 (2008: 219) では *čok* 「ない」に疑問詞疑問接辞が付加しうることが指摘されるが、例文も分析も示されていない。

#### 4. トゥバ語の疑問詞疑問接辞の存在否定文における用法

第2節ではサハ語の疑問詞疑問接辞の用法を概観し、疑問詞疑問文接辞が反語文や譲歩節にも現れることを示した。第3節ではトゥバ語の疑問詞疑問接辞の用法を概観し、疑問詞疑問文接辞が反語文、譲歩節、相関構文（の先行節）、存在否定文にも現れることを確認した。このように両言語の疑問詞疑問接辞は、疑問詞疑問文以外にも現れる（表1）。これらのうち反語文・譲歩節・相関構文（の先行節）は、疑問詞を含み述語として定形動詞が現れるという点で、疑問詞疑問文と共通している。ここで問題となるのは、トゥバ語の疑問詞疑問接辞がなぜ存在否定文（つまり疑問詞を含まない節）にも現れるのかである。本節では、この点について主として語用論の観点から考察を行う。

<sup>6</sup> ただし Anderson and Harrison (1999: 89) は「疑問詞の関係詞的用法」(“relative uses of the interrogative pronouns”)として言及するに留まっており、相関構文という用語は用いていない。

[表 1] トゥバ語とサハ語の疑問詞疑問接辞の用法対照

	疑問詞疑問文	反語文	譲歩節	相関構文	存在否定文
トゥバ語	○	○	○	○	○
サハ語	○	○	○	×	×

発表者の調査では、疑問詞疑問接辞-(i)l が（疑問詞疑問文ではない）存在否定文に現れる例文は合計 18 例が見つかった（コーパス 5 例，例文集（中嶋 (2008)）8 例，会話集（Dambaa・高島 (2008)）2 例，インターネット検索 3 例）。これらの例は、2 つのタイプに分けられる。

1 つは全部否定文である（2 例）。トゥバ語の全部否定文では、疑問詞に接語=*daa* が後続し、否定述語と呼応する。

- (16) *ol kiži kayda =daa čog-ul*  
 あの 人 どこに =CLT ない-WHQ  
 「あの人はどこにもいない」

もう 1 つは話し手の心的状態に関わる文である（16 例）。存在否定文の主語として現れる名詞の大半は *xöön* 「気分」、*küzel* 「希望」、*tura* 「望み」、*čay* 「暇」で、いずれにも 1 人称単数所有接辞が付加している。(19)のようにそれ以外の名詞も現れるが、やはり話し手の心的状態を述べている。

- (17) *teatr ba-ar xöjn-üm čog-ul*  
 劇場 行く-PTCP 気分-POSS.1SG ない-WHQ  
 「私は劇場に行く気がない」 [中嶋 (2008: 32)]

- (18) *meeŋ dištan-ir küzel-im čog-ul*  
 1SG-GEN 休む-PTCP 希望-POSS.1SG ない-WHQ  
 「私は休みたい気持ちがない」 [Dambaa・高島 (2008: 44)]

- (19) *mungara-vas arga-m čog-ul*  
 悩む-NEG.PTCP 方法-POSS.1SG ない-WHQ  
 「私は悩まないわけにはいかない」（文字通りには「私が悩まない方法はない」）

筆者は、以上の結果を踏まえながら聞き取り調査を行った。疑問の存在否定文では、聞

き手の心的状態を主語としうる（例文(20)、この時には肯否疑問の接語=*be* と共起できる）。3 人称の心的状態を主語とすることも可能だが、この場合にも語用論的にはあくまで話し手の判断を含意する。

- (20)      *čoru-ur*              *xöŋn-üŋ*              *čog-ul =be*  
          行く-PTCP              気分-POSS.2SG              ない-WHQ=Q  
          「君は行く気がないのか？」

- (21)      *ava-m*                      *čay-i*                      *čog-ul*  
          母-POSS.1SG              暇-POSS.3SG              ない-WHQ  
          「母には暇がない（のだと話し手が判断した）」

日本語や韓国語等では、感情述語の人称制限が知られている（風間 (2013) など）。例えば日本語の「風間先生は怖い」では、感情主体は3人称主語ではなく話し手になる。トゥバ語の存在否定文にも、類似の語用論的制約がある。このような制約は、言語類型論研究では自己性 (egophoricity) と呼ばれる。自己性が関与する典型的な分布では、表 2 に示すように、平叙文の話し手と疑問文の聞き手が同様にマークされる。

[表 2] 自己性による人称と文タイプの相関

	平叙文	疑問文
1 人称	EGO	NON-EGO
2 人称	NON-EGO	EGO
3 人称	NON-EGO	NON-EGO

(San Roque et al. (2018: 5) を参考に作成)

Widmer and Zúñiga (2017: 420) によれば、自己性は比較的新しく注目された概念であり、一般に受け入れられた定義はまだ無い<sup>7</sup>。Widmer and Zúñiga (2017: 422) では、自己性は証拠性 (evidentiality) ととも認識モダリティとも異なる概念だとされる。発表者の理解では、自己性とは、命題成立の判断を話し手のみが行える（聞き手は行えない、疑問文ではこの逆）ことが定義上で最も重要である。従って自己性と証拠性は、例えば発話現場における視覚や聴覚による情報などのケース（話し手も聞き手も同様にアクセス可能）において、

<sup>7</sup> 自己性 (egophoricity) に関しては、Aikhenvald (2004: 127), Dixon (2010: 222), San Roque et al. (2018: 6-9) などに詳しい整理がある。また Bickel and Nichols (2007: 223) の脚注 19 にあるように, conjunct, locutor, egophoric, subjective, congruent 等の用語が同様の概念を表すものとして用いられている。



明確な相違を見せるはずである。一方で心的状態・推測・記憶などは、本人のみがアクセス可能な情報の典型である。話し手の心的状態に関わる文には、(22)のような例も含むと考える。この例では話し手の記憶のみが頼りであり、話し手・聞き手の双方が財布の中身を確認しながら述べるような語用論的状况では不適切となる。

- (22)      *men-de*          *adirik*          *aška*          *čog-ul*  
                  1SG-LOC          少額の          金          ない-WHQ  
                  「私には小銭がない (のは記憶により分かっている)」          [中嶋 (2008: 5)]

つまり存在否定文における疑問詞疑問接辞は、平叙文では話し手のみが（主として心的状態の）不在に関してアクセス可能であり、疑問文では聞き手のみが不在に関してアクセス可能であるような語用論的状况で用いられると結論付けられる。

ただし残る問題は、トゥバ語の疑問詞疑問接辞が、疑問詞を含まない節のうちなぜ *čok* 「ない」を述語とする文にのみ出現可能であるのか、という点である。現段階での仮説として筆者は、トゥバ語の疑問詞疑問接辞の用法が語用論的に拡張しつつあると考えている。この見方は、同系のサハ語の疑問詞疑問接辞が、疑問詞という文法的契機が無ければ現れないことが傍証となっている。

## 5. まとめ

本論文では、サハ語とトゥバ語の疑問詞疑問接辞の用法を記述し、さらに両言語の疑問詞疑問接辞の用法を対照した。結果として、サハ語の疑問詞疑問接辞は反語文、譲歩節にも現れ、トゥバ語の疑問詞疑問接辞は反語文、譲歩節、相関構文（の先行節）、存在否定文にも現れることが分かった。つまり、トゥバ語の疑問詞疑問接辞の方が広い範囲で用いられることになる。トゥバ語の疑問詞疑問接辞は、疑問詞を含まない節（存在否定文）にも現れる点が大きな特徴である。別の見方をすれば、サハ語の疑問詞疑問接辞の出現には文法的動機（疑問詞を含む）が存在すると見なせるのに対し、トゥバ語の疑問詞疑問接辞の出現には語用論的動機を考える必要がある。本論文では自己性 (egophoricity) からの説明を試みた。

トゥバ語の存在否定文における疑問詞疑問接辞は、平叙文では話し手の心的状況が無いことを述べる文に現れ、疑問文では聞き手の心的状況が無いことを尋ねる文に現れる。3人称の心的状態を主語とすることも可能だが、この場合にも語用論的にはあくまで話し手の判断を含意する。

## 略号

ABE: abessive, ABL: ablative, ACC: accusative, AOR: aorist, AUX: auxiliary, CAUS: causative, CLT: clitic, CVB: converb, FUT: future, GEN: genitive, HON: honorific, IMP: imperative, LOC: locative, NEG: negative, PL: plural, POSS: possessive, PRS: present, PST: past, PTCP: participle, Q: question, SG: singular, WHQ: wh-question

## 参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Anderson, Gregory David and K. David Harrison. (1999) *Tyvan*. München: Lincom Europa.
- Aydemir, Ahmet. (2015) Interrogative structures in Tuvan. *Turkic languages*. vol.19, 113-127.
- Bickel, Balthasar and Johanna Nichols. (2007) Inflectional morphology. Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description. Volume 3: Grammatical categories and the lexicon*. [2nd Edition]. Cambridge: Cambridge University Press. 169-240.
- Dambaa, O.V.・高島 尚生 (2008) 『トゥヴァ語会話集』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Dixon, R.M.W. (2010) *Basic linguistic theory. Volume 2: Grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Isxakov, F.G. and A.A. Pal'mbax. (1961) *Grammatika tuvinskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. [The grammar of the Tyvan language.] Moskva: Vostočnoj Literatry.
- Krueger, John R. (1977) *Tuvan manual*. Bloomington: Indiana University.
- San Roque, Lila, Simeon Floyd, and Elisabeth Norcliffe. (2018) Egophoricity: An introduction. Simeon Floyd, Elisabeth Norcliffe, and Lila San Roque (eds.) *Egophoricity*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Widmer, Manuel and Fernando Zúñiga. (2017) Egophoricity, involvement, and semantic roles in Tibeto-Burman languages. *Open Linguistics*. vol.3(1), 419-441.
- Xaritonov, L.N. (1947) *Sovremennyj jakutskij jazyk*. [The modern Yakut language.] Jakutsk: Gosizdat JaASSR.
- 江畑 冬生 (2018) 「トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-*dir* の機能：話し手・聞き手の認識からの説明」 『日本言語学会第 156 回大会 予稿集』 313-318.
- 江畑 冬生・Popova Nadezhda. (2006) 『サハ語文法 [改訂版]』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 風間 伸次郎 (2013) 「アルタイ型言語における感情述語」 『北方人文研究』第 6 号, 83-101.

- 高島 尚生 (2008) 『基礎トゥヴァ語文法』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 中嶋 善輝 (2008) 『トゥヴァ語基礎例文 1,500』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.